

# ぼくの大せつなふたりの妹

鹿兒島県 日置寺立妙円寺小学校 二年

下川 陽翔しもかわ ひなた

「ぼくがしゆくだいをしていると、いつも妹たちがさわぎです。」

「ほーちゃんたち、ちよつとしずかにしろよ。」

と言つても、

「しいらんべえ。」

とはしり回り、ぼくをおこらせる。そしたら、お母さんが来て、

「ひなと、あんたのしゆう中力がないんでしようがあ。」

と、なぜだか、ぼくがおこられた。

「あーあ。一人っ子だつたらよかつたな。」

と、ぼくがつぶやくと、

「なんでね、妹たちがいることにかんしゃしないと。」

と、お母さんは言った。

ぼくには、二人の妹がいる。ちよつと口うるさい妹と、まねつこ

大すきの妹だ。

ぼくは、妹たちにかんしゃするつてどういうことだろうつて

思った。もし一人っ子だつたら、いつも自ゆうで気らくだし、大

すきなお父さんとお母さんを、一人じめでできるのに。だから、

ぼくは、妹たちをかんさつすることにした。

ある日、ぼくがお父さんにおこられてないいた。くらいい

やでせいざをしていたぼくのところ、そつと妹が来て、

「ひー、だいいじようぶだよ。ほのかがいるから。」

と、やさしいことばでなくさめてくれた。こんどは、にんじやの

ように、ササツと下の妹があらわれて、へやのすみになげられ

たゲームのカセットをひろつて、お父さんのようすを見ながら、

「ひーのだいいなものだから、かくしてて。」

と、お母さんにわたしていた。妹たちがいてくれて、心強かつ

た。妹はぼくのさい強のみかたなんだ。

夏休みに、妹たちが、おじいちゃんのをいえに、とまりに行つた。

ぼくがのぞんだ一人っ子じようたいだつた。でも、お父さんとお

母さんには、ぼくのがままは通じなかつた。

お母さんとゲームがしたかつたけど、

「いそがしいから一人でしてて。」と言われた。それなら、お

父さんとたたかいたいことをするほうがたのしいから、あそん

でもらつた。けれども、

「ひなと、そろそろねようか。」

と言つて、ぼくより先にねてしまつた。

「うーん。なんかちがうなあ。」と、ぼくはつまらなかつた。

つぎの日、妹たちがかえつてくるのが、まち遠しかつた。

「ひー、ただいま。ひー、さみしかつた。」

と聞かれて、

「いや、まあまあかな。」

と答えながらも、ぼくは、すごくうれしかつた。いつもと同じ

あそびをしていても、すこくたのしくかんじた。妹たちは、

ぼくのさい高のあそびなかなんだ。

ぼくは、たぶんこれからも、妹たちとけんかをするだろう。

だけど、それもしあわせなことなんだ。ぼくの妹になつてく

れて本当にありがとう。これからもよろしくね。